

『天草版平家物語』考（5）

市 井 外喜子

A Study of “Amakusaban-Heike-Monogatari”（5）

Tokiko Ichii

1 はじめに

古典平家物語（『平家物語』諸本の代表として、高野本：新日本古典文学大系『平家物語』上下 梶原正昭・山下宏明校注 岩波書店および国会本：新潮日本古典集成『平家物語』上中下水原一校注 新潮社）と、天草版平家物語（『天草版平家物語対照本文及び総索引』 江口正弘著 明治書院）との構成比較を試み、これまで五回にわたり報告してきた。

最初は『天草版平家物語』考、大東文化大学紀要 人文科学第38号 平成12年3月のものである。天草版平家物語巻第一（全12章段）の構成を、古典平家（代表として岩波書店刊 新日本古典文学大系『平家物語』）巻第一～巻第三と比較し、その構成上の特徴を報告した。

続いて、自著『天草版平家物語私考』（新典社 平成12年12月）では、天草版平家物語巻第一に、巻第二（全10章段）を加えて、古典平家（高野本：新日本古典文学大系『平家物語』、斯道文庫本：『百二十句本平家物語』汲古書院、国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第四・巻第五と比較を行ない、その構成上の特徴を報告した。

さらに『天草版平家物語』考（2）、大東文化大学紀要 人文科学第40号 平成14年3月では、天草版平家物語巻第三（全13章段）の第一章段（木曾殿の由来と、平家に対して謀叛ををこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと）のみをとりあげ、古典平家（国会本：新潮日本古典集成『平家物語』）巻第六との構成比較を吟味し、その結果を報告した。

また、『天草版平家物語』考（3）、大東文化大学紀要 人文科学第41号 平成15年3月では、天草版平家物語巻第三（全13章段）の構成を、古典平家（国会本）巻第六～巻第八と比較し、その構成上の特徴を報告した。

次いで、『天草版平家物語』考（4）、大東文化大学紀要 人文科学第42号 平成16年3月では、天草版平家物語巻第四（全28章段、実質29章段）の構成を、古典平家（国会本）巻第九～巻第十二と比較し、その構成上の特徴を報告した。

今回は、天草版平家物語を編むに際しての基準・手順の吟味と、その工夫が最もよく見られる

全四巻の第一章段の観察を試みたい。

天草版平家物語の序 読誦の人に対して書す に、編纂者不干ハビヤンは次のような一節を記している。注目すべき点を箇条書きにして示す。

- ①（書写に臨んで、師は）いまこの平家をば書物の如くにせず、兩人相對して雑談をなすが如く、ことばのてにはを書写せよ。
- ② この国の風俗として、一人にあまたの名、官位の称えあることをも避くべし。
- ③（師の命に従って、ハビヤンは）この物語を力の及ぶところわ本書のことばを違えず書写し、拔書となしたるものなり。

この①・②および③の目的基準に従って成る天草版平家の様相を、巻第一第一章段を元にしてみしてみる。

第一章段の表題は、平家の先祖の系図、また忠盛の上のほまれと、清盛の威勢栄華のこと、として示され、高野本平家と対照すると祇園精舎・殿上闇討・鱸・禿髪・吾身栄花の5章段分を取りこんでいることになる。

書物の如くにせず、兩人相對して雑談をなすが如くという書写目的にそって、語り出される聞き手兼進行役をつとめる右馬の允（VM.）と話し手の喜一検校（QI.）との様子を、頁をおって示してみる。なお巻第一第一章段は、3頁9行～13頁9行におよんでいる。

3 9 VM. 検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ。

QI. やすいことでござる：をうかた語りまらしょうず。まず平家物語の書きはじめにわを
ごりをきわめ、人をも人と思わぬやうなるものわやがて亡びたとゆう証跡に、

と、VM. からの請いをうけてはじまる問答には、祇園精舎・殿上闇討（忠盛昇殿・伊勢瓶子と囃されるところまで）が最初に語られる。続いて、次のように

6 20 VM. さてさてそれわいたづらなことを公家たちわせられたの？

QI. そのことでござる。あの公家たちがこのやうなことをせらるることわ、いまに始めぬ
ことでござある：

と、語られるのは、季仲・家成五節の舞である。その後、VM. QI. のやりとりが続いて二度おこなわれる。

7 16 VM. そのやうに悪口狼藉をせられたれども、みな人がこらえていたよの？

QI. そのことでござる：上古にわかやうのことがござったれども、ことが出できなんだが、
末代にわなんとあらうぞとゆうて、みな^①とも忠盛の面目を失われた時わ、氣遣いをいたされたと、きこえてござる。

7 23 VM. してそれわなんと果ててあつたぞ？

QI. なかなか、なを先を語りまらしょうず。さてそのままでもをかれいで殿上人たちが一

度にまた忠盛のことを帝王え訴えられまらした：

と語り続けられるのは、殿上人が忠盛を批難し、忠盛が申しひらきをするという、この問答で殿上闊討相当部分は語りおさめられる。

9²¹ VM. さてさて忠盛とゆう人わをぞい人であったの？

QI. して、こればかりとをぼしめすか？忠盛とゆう人わ文武二道の人でござった。

と、続くのは鱸、忠盛の和歌についてである。

10⁹ VM. それわいかほどの齢を保たれてあったぞ？

QI. 年五十八で死なれてござる清盛わ嫡男でござったによって、そのあとを継いで次第次第に官位にもあがり、ついにわ天下をも一人してほしいままにせらるるほどの威勢でござった。(鱸、後半部分相当にあたる。) 続いて、

10¹⁶ VM. なう喜一ついでにその清盛のことをも聞きたいよ。

QI. こなたさえくたびれさせられずわ、私わなんぼうなりとも語りましょう。

10²⁰ VM. いいや、このやうなことをば身どもらわ七日七夜聞いてもあかぬぞよ。

QI. それならば語りましょう。清盛家督を受けとられてより、右に申したごとく、威勢、位も肩を並ぶる人もござなかった。さて清盛五十一の頃病にをかされ、存命も不定に見えたによって、その祈りのためにか出家入道して法名をば浄海と名のられてござった。

として語られるのは、禿髪相当部分である。そのうちの後半部分に吾身栄花相当部分が要領よく、まとめて語られる。

13⁴ VM. して清盛の嫡子をばなんとゆうたぞ。

QI. 重盛と申した。また次男わ宗盛、三男をば知盛と申した。この人々の威勢いづれをいづれとも申さうずるやうもござなかった。

と、第一章段の語りはおわる。この VM. と QI. の対話の前段階において、禿髪に続いて吾身栄花が語られる中には、建礼門院を含む娘たちの栄華が語られている。ここで、重盛・宗盛・知盛の栄華を別にとり出しているところに工夫がみられる。第二章段は、重盛の次男関白殿え狼藉をなされたこと：これ平家に対しての謀叛の根源となったこと、の表題のもと、高野本、殿下乗合相当部分が語られる。

このような VM. と QI. による対話形式により語られる平家の物語は、整理がゆきとどき、理解が容易である。外国人宣教師（主としてポルトガル人）のための日本語テキストとしての配慮が十分に払われている。

次に、この国の風俗として、一人にあまたの名、官位の称えあることをも避くべし。とある書写目的は、上節に続いて、如何となれば、これものの理をみだすによって、他国のことばを学ばんとする初心の人のためにわ大きな妨げなり、とある。これに対する様相を、頁をおって示してみる。とりあげるのは、Qiyomori とする。高野本と対比する。

3 17	Rocufara no nhūdō	六波羅の入道
	Saqi no Danjō daijin	前太政大臣
	Qiyomoricō	平朝臣清盛公
20	Qiyomori (の先祖わ)	其先祖
10 11	Qiyomori (QI.)	
16	Qiyomori (VM.)	
22	Qiyomori (QI.)	(清盛)
11 1	Qiyomori	清盛公
10	Qiyomori (の御一家のひとつと)	六波羅殿 (の御一家の君達)
12	Qiyomori	入道相国
22	Qiyomori	禅門
24	Qiyomori	入道相国
12 13	Qiyomori	六波羅殿
19	Qiyomori (わわが身の栄華を～) (吾身の栄花を～)	
13 4	Qiyomori (VM.)	

高野本の清盛公・六波羅殿・入道相国・禅門等を、天草版では Qiyomori 一つに統一されている。また天草版では、VM. あるいは QI. が用いる Qiyomori, 主語をおぎなう Qiyomori のように、理解を助ける配慮がゆきとどいている。

次いで、ハビヤンが、力の及ぶところは本書のことばを違えず書写し、とする点に注目したい。天草版平家11頁1～19（禿髪前半部分）の天草版平家と高野本との対比を示す。

天：さて Qiyomori 五十一の頃病にをかされ、存命も不定に見えたによって、その祈りのために
高：角で清盛公、仁安三年十一月十一日、年五十一にて、病にをかされ、存命の為に

か出家入道して法名をば浄海と名のられてござった。天道からその所作を御納受なさるる
忽に出家入道す。 法名は、浄海とこそ名のられけれ。

しるしにか、病もたちどころに平癒して、人の従いつくことわ誠に吹く風の草木を靡かすが
其しるしにや、 宿病たちどころにいへて、天命を全す。 人の従ひつく事、 吹風の草木をなびかすがごとし。

ごとく：また世のあまねく仰ぎ敬うたことわ、さながら降る雨の国土を潤すやうにござった。

世のあまねく仰げる事、 降る雨の国土をうるほすに同じ。

それによってかの Qiyomori の御一家のひとつととさえいえば、公家武家ともに面をむかえ、

六波羅殿の御一家の君達と言ひてんしかば 花族も栄耀も、 面を向へ、

肩を並ぶる人もござなかった。Qiyomori の小舅に時忠の卿と申す人がござったが、この一門
肩を並ぶる人なし。 されば入道相国のこじうと、平大納言時忠卿ののたまひけるは、 「此一門に

でない人わ皆人非人ぢやと申された。それによっていかな人もそのゆかりに結ばをれうとつ
あらざらむ人は、皆人非人なるべし」とぞのたまひける。 かゝりしかば、いかなる人も、相構て其ゆかりにむすばゝれむとぞしける。

かまつた。あまりのことに衣文のかきやう、烏帽子のためやうまでも六波羅やうといえは、
衣文のかきやう、 烏帽子のためやうよりはじめて、何事も六波羅様と言ひて上げれば、
一天四海のひとびとみなこれを学ぶほどにござった。
一天四海の人、 皆是をまなぶ。

雑談形式、文語体から口語体へと改めるのに、理解を得るためのことばの増減は見られるが、文意の一致をみることができよう。天草版平家で注目される「天道（Tentō）」について簡潔に記しておきたい。

古典平家では、高野本：其しるしにや、龍大本：其しるしにや、国会本：そのしるしにや、葉子十行本：その故にや と認められるところが、天草版では天道（tentō）からその所作を御納受なさるるしるしにかと見られる。この tentō は、天草版平家には他に 5 ヶ所みられる。

- 巻第一第六 いまこれらの莫大の御恩を忘れて、みだりがわしゅう法皇を傾けさせられうずることわ tentō の御内証にもそむきまいらせられうず （第二 教訓状）
- 巻第一第十 人の思いを休めさせられれば思し召すこともかない、人の願いをかなえさせられれば、tentō これを御納受あつて、御願もすなわち成就いたいて、中宮やがて皇子御誕生なされて（巻三 赦文）
- 巻第二第十 これわ全く頼朝が高名でわない：ひとえに tentō の御計らいぢやと言うて、喜ばれた。（巻五 五節之沙汰）
- VM. さても平家わいかう符が悪かったの？
QI. まことに tentō から離されたと、見えてござる （巻第三第六：天草版独自の問答形式ではじめられる部分のため、直接対応する箇所が古典平家には無い。）
- 巻第三第十 豊後の国に代官の心になっていられた頼経とゆう人のところえ、京からを使いがたつて平家わ tentō にも離され、君にも捨てられまらして、都を出で波の上に落人となって漂うを鎮西の者どもが受けとつてもてなすこそ聞こえぬことなれ（巻八 緒環）

以上が、天草版平家に現われる tentō のすべてである。古典平家には対応する 1 例の「天道」もみられない。古典平家では、天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩および神明である。またこれらの天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明は、天草版平家には、その例が見られない。『日葡辞書』には、Tentō : Tenno michi 天の道、すなわち、天の秩序と摂理と、すでに我々はデウス（Deos 神）をこの名で呼ぶのが普通であるけれども、ゼンチヨ（gētios 異教徒）は上記の第一の意味「天の道」以上に考え及ぼしていたとは思われない、とある。「天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明」を、デウスを意味する「tentō」に改めた不干ハビヤンの、日本在来の仏教や神道に対峙した視点をうかがうことができる。ハビヤンが tentō の意味を厳しく峻別すると同時に、平家物語の内容をも吟味して天草版平家を成した結果によるものと考えられる。

以上、古典平家から天草版平家を編む際の不干ハビヤンの工夫を見たが、外国人宣教師の日本

語テキストとしての配慮（理解を容易にしようとする）が特筆できる。それと同時に、tentōを通してみると、古典平家から天草版平家を抄訳した日本人のイルマン、不干ハビヤンが細心の注意をはらい、キリスト教と対立関係にある神道・仏教的な要素を巧みに排除していることをも注目できる。

2 天草版平家各巻第一章段・古典平家との対応

前述のような書写基準（目的）にしたがって古典平家から抄訳された天草版平家の各巻冒頭章段における様相をみることにする。冒頭章段には、各巻が持つ特徴が象徴されているはずである。

最初に各巻冒頭章段の表題とともに、古典平家と対比する第一章段の語りはじめ部分を示す。

巻第一 第一

平家の先祖の系図、また忠盛の上のはまれと、清盛の威勢栄華のこと。

巻第二 第一

祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと。

巻第三 第一

木曾殿の由来と、平家に対して謀叛ををこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと。

巻第四 第一

頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をしようとつかいをたてたれども、平家同心せられなんだこと。

最初に巻第一第一章段における VM. と QI. の語りはじめと、その相当部分の古典平家を示す。

VM. 検校の坊、平家の由来が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ。

QI. やすいことでござる：をうかた語りまらしょうず。まず平家物語の書きはじめにわをگریをきわめ、人をも人と思わぬやうなるものわやがて亡びたとゆう証跡に、大唐、日本にをいてをگریをきわめたひとびとの果てた様体をかつ申してから、さて六波羅の入道先の太政大臣清盛公と申した人の行儀の不法なことをのせたものでござる。さてその清盛の先祖わ桓武天皇九代の後胤讃岐守正盛が孫刑部卿忠盛の嫡男でござる。この忠盛の時までわ先祖のひとびとわ平氏を高望の王の時くだされて、武士となられてのち、殿上の仙籍をば許させられなんだ。

この天草版平家巻第一第一章段は、平家物語全体の冒頭である。次に示す高野本、巻第一 祇園精舎部分に相当する。天草版・古典（高野本）両者における様相の異なりが、典型的に見られるところである。

巻第一 祇園精舎

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ。偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の禄山、是等は皆旧主先皇の政にも従はず、楽みをきはめ、諫をも思ひいれず、天下の乱れむ事をさとらずして、民間の愁る所を知らざししかば、久しからずして、亡じにし者ども也。近く本朝をうかゞふに、承平の将門・天慶の純友・康和の義親・平治の信頼、此等は奢れる心もたけき事も、皆とりどりにこそありしかども、まぢかくは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、伝うけ給るこそ、心も詞も及ばれぬ。

其先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。彼親王の御子高視の王、無官無位にして失せ給ぬ。其御子高望の王の時、始て平の姓を給って、上総介になり給しより、忽に王氏を出て人臣につらなる。其子鎮守府將軍義茂、後には国香と改む。国香より正盛にいたる迄六代は、諸国の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず。

続いて巻第二第一章段における VM. と QI. の語りはじめと、その相当部分の古典平家を示す。
VM. さて誠に誰にも、かれにも清盛わ難儀をかけた人ぢゃの？またその祇王がことをも聞きたい、を語りあれ。

QI. 長いことなれども、申さうず。清盛わこのやうに天下を掌に握られたによって、世間の謗をもはばかりず、人の嘲りをもかえりみいで、不思議なことのみをせられてござる。例えば、そのころ都に聞えた白拍子の上手に祇王、祇女というをとといのものがござったが、とちと言う白拍子が娘であった。姉の祇王を清盛の愛せられたによって、妹の祇女をも世上の人がもてなすことわ、なのめならなんだ。母とちにもよい家を作ってとらせ、毎月に百石、百貫を送られたれば家内富貴して、楽しいこと限りなかった。

この天草版平家巻第二第一章段は、次に示す高野本、巻第一 祇王に相当する。巻第一第一章段とは異なり、巻第二第一章段は、古典（高野本）平家との異なりが少ないことが注目される。

巻第一 祇王

入道相国、一天四海をたなごゝろのうちに握り給ひしあひだ、世のそしりをも憚らず、人の嘲りをもかへりみず、不思議の事をのみし給へり。たとへば其比、都に聞えたる白拍子の上手、祇王・祇女とておとゝいあり。とちといふ白拍子がむすめなり。あねの祇王を入道相国最愛せられければ、是によって、いもうとの祇女をも、世の人もてなす事なのめならず。母とちにもよき屋つくつてとらせ、毎月に百石・百貫ををくられければ、家内富貴して、たのしい事なのめならず。

続いて巻第三第一章段における VM. と QI. の語りはじめ相当部分と、それに対応する古典平家（国会本）を示す。国会本を用いるのは、巻第二の構成特徴を見た際に、高野本（覚一本）に比

して百二十句本「斯道文庫本」・「国会本」との関連性の強さを明示できたためである。したがって巻第三の各章段の比較は、国会本との対応関係をみることになる。

VM. ゆうべの物語が余り本意ないほどに、いまわまた木曾殿の成り立ち、その謀叛のやうをもを語りあれ。

QI. さてさて果てしもないことを仰せらるる：さらばまた語りましょう。

VM. その木曾殿わ何とやうに謀叛を起されてあったぞ？その由来をもここに続けてを語りあれ。

QI. まづその木曾殿わそのころ信濃の国にをちゃってござる。その父義賢わ武蔵の国で悪源太に討たれたが、その時木曾殿わ二歳であったを母御が泣く泣く抱いて信濃の国え越して兼遠と言う者が許え行つて、いかにもしてこれを育てて、人にないてを見せあれと、言われたれば、兼遠受け取つてかいがいしゅう二十余年養育して、やうやう人とならるるに従つて、力も世にすぐれて強う、心も並ぶ者がなかった。

古典平家（国会本）巻第六 第五十四句義仲謀叛が、比較対照部分である。

巻第六 第五十四句 義仲謀叛

そのころ信濃の国に、木曾の冠者義仲といふ源氏ありと聞こえけり。これは故六条の判官為義が次男、帯刀先生義賢が子なり。義賢は久寿二年八月十六日、武蔵の国大倉にして、甥の鎌倉悪源太義平がために誅せられたり。そのとき義仲二歳になりけるを、母泣く泣くいだいて、信濃の国に越えて、木曾の中三兼遠がもとへ行き、「いかにもしてこれを育て人になして見せ給へ」と言ひければ、兼遠請けとつて、かひがひしう二十四年養育す。

この天草版平家巻第三第一章段は、古典平家、国会本 巻第六 第五十四句 義仲謀叛が相当部分になるが、高野本では巻第六 廻文・飛脚到来相当部分に重なる。語りはじめ、およびその内容において問題となる点については、後に詳述する。（第五十一句ではなく、第五十四句から、はじまっている。）

続いて巻第四第一章段における VM. と QI. の語りはじめと、その相当部分の古典平家（国会本）を示す。

VM. 頼朝わ木曾がこのやうな狼藉を聞いてしづめうともせられなんだか？

QI. なかなか頼朝もこの狼藉を聞いてしづめうずるために、弟の範頼と、義経をさしのぼせられたが、すでに法住寺殿をも焼き払いまして、天下を暗闇にないたと聞こえたれば、さうなう上つて軍をしょうやうもない：まづこれから関東え子細を申さうずると言うて、尾張の国の熱田にいらるうちにこのことを訴ようずると言うて、京から公朝、時成とゆう者が馳せ下つて、義経えこの由を告げたれば、すなわち公朝を関東え下された：

この天草版平家巻第四第一章段は、古典平家、国会本 巻第八 第八十句 義経熱田の陣から起されていることが注目される。それも小題目：公朝・時成熟田下向相当部分から始まっている。後に詳述する。

続いて古典平家（国会本）巻第八 第八十句 義経熱田の陣（公朝・時成熟田下向）を載せる。

巻第八 第八十句 義経熱田の陣

北面に侍ひける宮内の判官公朝、藤内左衛門時成、尾張の国へ馳せ下る。これはいかにといふに、「鎌倉の兵衛佐の舎弟、蒲の冠者範頼、九郎冠者義経、二人都へ上るが、尾張の国熱田の大宮司がもとにおはする」と聞きて、木曾が悪行のこと訴へんがための使節とぞ聞こえし。

そもそも、この人々はなにごとに都へは上るぞといふに、平家都におはせしほどは、「道の狼藉もあらば」とて、東八箇国の年貢を君に奉ることもなし。平家都を落ちてのち、兵衛佐、「王地にはらまれて、さのみ年貢を対捍せんもおそれなれば」とて、両三年の年貢の未進を沙汰して、一千人の兵士をそへ、都へ参らせられけるほどに、道にて、「いくさあり」と聞き、「左右なく上り、いくさしてはあしかりなん。ひき退いて、鎌倉殿へ子細を申さん」とて、大宮司がもとにぞおはしける。(公朝・時成熱田下向)

2-1 天草版平家巻第一第一章段

天草版平家巻第一第一章段 平家の先祖の系図、また忠盛の上のはまれと、清盛の威勢栄華のこと、は、前述のように清盛の先祖歴代の大要を語り、中でも忠盛の「殿上闇討」を詳述し、さらに清盛の昇進と平家一門の繁栄を語りつくしている。古典平家（高野本）からは、祇園精舎・殿上闇討・鱸・禿髪・吾身栄花の5章段分をとりこんでいる。

第一章段において特に注目されるのは、その冒頭である。古典平家「祇園精舎」とともに、その冒頭部分を再度示す。

QI. が語りはじめる「祇園精舎」相当部分は、次のようになる。

(やすいことでござる：をうかた語りまらしょうず。) まず平家物語の書きはじめにわをごりをきわめ、人をも人と思わぬやうなるものわやがて亡びたとゆう証跡に、大唐、日本にをいてをごりをきわめたひとびとの果てた様体をかつ申してから、さて六波羅の入道先の太政大臣清盛公と申した人の行儀の不法なことをのせたものでござる。さてその清盛の先祖わ（以後、清盛の先祖について簡潔な略史が続く）

古典平家「祇園精舎」は、次のような冒頭を持つ。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ。偏に風の前の塵に同じ。

古典平家の総序にも相当するこの部分が、天草版平家では排除されている。語り本系（屋代本・竹柏園本・鎌倉本他）あるいは読み本系（源平闘諍録・四部合戦状本・延慶本他）と、『平家物語』には冒頭に「祇園精舎」を持ち、諸行無常・盛者必衰の仏教思想が主題とされている。この冒頭の「諸行無常」「盛者必衰」を欠く天草版平家は、異教である仏教的視点からではなく「をごりをきわめ、人をも人と思わぬやうなるもの」としての清盛の、「行儀の不法なことをのせたもの」として、『天草版平家物語』を語り始めようとしている。古典平家との乖離が大きい。古

典平家から独立した天草版平家を象徴的に現わしていると言えよう。

また同じように注目されるのは、前述した「天道 Tentō」である。

天草版平家では、全体として6例の Tentō がみられる。この Tentō は、古典平家では「天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明」が対応している。またこれら「天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明」は、天草版平家にはその例が見られない。平家物語から、天草版平家物語を抄訳した日本人のイルマン、不干ハビヤンは、細心の注意をはらい、キリスト教と対立関係にある神道・仏教的な要素を巧みに排除している一端を、「Tentō」からも確めることができる。

「Tentō」の持つ二面性（『日葡辞書』にみられる一般意味・教会意味）を、用意周到な分別のもとに使用している。不干ハビヤンの創意工夫が凝らされているところである。

2-2 天草版平家巻第二第一章段

天草版平家巻第二第一章段 祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと、は、古典平家高野本では巻第一 祇王に、国会本・斯道文庫本では、第5句（第3句）義王・第6句（第4句）義王出家に相当する。巻第一第一章段が、高野本から5章段分をとりこんでいるのとは、大きな差を示している。

また雑談形式に意をもちいた巻第一第一章段とは異なり、最初に

VM. さて誠に誰にも、かれにも清盛わ難儀をかけた人ぢゃの？またその祇王がことをも聞きたい、を語りあれ。

と請いを受けた喜一検校が、

QI. 長いことなれども、申さうず：清盛わこのやうに天下を掌に握られたによって、世間の謗をもはばかりず、人の嘲りをもかえりみいで、不思議なことのみをせられてござる。

と語り始め、「祇王」を語りおさめる。冒頭に雑談形式を持つのみである。その内容をみると、省筆の少ないことが特筆できる。

ここで注目されるのは「祇王 Guiuō」章段の位置である。

古典平家（高野本）巻第一 吾身栄花 に続いて 祇王 が位置を占めていたものが、天草版平家では大きく移行して巻第二の冒頭に来ている。この Guiuō 章段のような位置の移行をみせるものは、他には見られない。このことが注目点となる。

これまでに天草版平家 Guiuō 章段の位置について論述された中から、次の書をあげておきたい。

山田孝雄『平家物語考』勉誠社

土井忠生『吉利支丹文献考』三省堂

小島幸枝『キリシタン文献の国語学的研究』武蔵野書院

ここでは鎌田廣夫『天草本平家物語の語法の研究』おうふうの論述を、記しておきたい。

「天草本」編者の意識が専ら頼政謀叛に傾き、謀叛の由来を宗盛の悪行にしばって祇王の話と

結びつけようとした意図を、編者の原典に対するかうした態度からも察知することができる。
「天草本」祇王の話と頼政謀叛との並べ方は全く無関係だとは思はれないのである。

この引用文にあるように、不干ハビヤンの意図的な配置によって「Guiuō 章段」は、巻第二冒頭に置かれたものと思われる。

Guiuō：清盛の「世間の謗をもはばかりず、人の嘲りをもかえりみいで、fuxiguina cotoのみをせられてござる」

高倉宮以仁王の事件：さても年来日ごろもあればこそあったに：三位入道ことし何たる心がついて謀叛をばをこされたぞと言うに、宗盛 fuxiguina coto をせられたゆえぢや、

とする各々の結末を語るところである。したがって鎌田廣夫氏の「天草本」祇王の話と頼政謀叛との並べ方は全く無関係だとは思はれないのである とされるのは、卓見と言える。

清盛に対する私憤から出家する Guiuō, 宗盛に対する私憤から高倉宮以仁王に対して「なましひに私には企られず、宮をすすめ参らせ」て謀叛を企てた頼政、この親子（清盛・宗盛）の fuxiguina coto が、平家衰亡の前兆となることを語るのが巻第二冒頭章段（祇王）であり、第二章段から第八章段に及ぶ7章段（高倉宮以仁王の事件）である。

古典平家とは異なる位置（巻第二冒頭）に「祇王」章段を移行させた天草版平家には、編者不干ハビヤンが巻第二の構成全体からの布置とした創意を読みとることができる。

2-3 天草版平家巻第三第一章段

天草版平家巻第三第一章段 木曾殿の由来と、平家に対して謀叛ををこされ、平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと、を、古典平家（国会本：巻第六）と対校させると次のようになる。この対校表は両平家の構成特徴の把握が容易なように、登載章段名の有無を明らかにしたものである。天草版平家の内容と僅かに拘わりを持つ古典平家の章段名をも登載章段としてとりあげた。

天草版平家巻第三	古典平家（国立国会図書館蔵本：巻第六）		備考 (高野本：巻第六)
	登載章段名	不登載章段名	
第一	第54句 義仲謀叛	第51句 高倉の院崩御 第52句 紅葉の巻 第53句 葵の女御 第55句 入道死去 第56句 祇園の女御 第57句 邦綱死去 第58句 須俣川 第59句 城の太郎頼死	廻文・飛脚到来
	第60句 城の四郎官途		横田河原合戦

さらに登載句：第54句義仲謀叛および第60句城の四郎官途における記述内容の登載有無を国会

本の小題目（小見出し）にしたがって示してみると、以下ようになる。

	登載小題目	不登載小題目
第54句 義仲謀叛	義仲幼少の事 義仲旗あげ 宇佐の大宮司飛脚	城の太郎受領 石川城落去
第60句 城の四郎官途	城の四郎信濃の国発向 井上の九郎武略の事 城の四郎戦に利を失ふ事 京中の平家油断の事	

上記の2表が、巻第三第一章段を語っている。第一章段は、国会本から54句義仲謀叛・60句城の四郎官途の2句のみをとりこんでいる。小題目からみると、54句では城の太郎受領・石川城落去が割愛されているが、60句はすべての小題目がとりこまれている。省筆の少なさが目につく。割愛された2つの小題目は、ともに直接木曾義仲と拘わりを持つものではない。また高野本からみると、巻第六からは、廻文・飛脚到来・横田河原合戦の3章段のみがとりこまれていることになる。この3章段は木曾との拘わりを持つものである。

VM. と QI. の語り出し、その後の展開をみると、次のようである。

VM. ゆうべの物語が余り本意ないほどに、いまわまた木曾殿の成り立ち、その謀叛のやうをもを語りあれ。

QI. さてさて果てしもないことを仰せらるる：さらばまた語りましょう。

VM. その木曾殿わ何とやうに謀叛を起されてあったぞ？その由来をもここに続けてを語りあれ。

QI. まづその木曾殿わそのころ信濃の国にをちゃってござる。その父義賢わ武蔵の国で悪源太に討たれたが、その時木曾殿わ二歳であったを

と、木曾の由来を題目にそって語りはじめるのは、国会本：54句義仲謀叛、高野本：廻文・飛脚到来に相当する箇所である。

QI. はさらに続けて、表題の「平家の味方の長茂と合戦してうち勝たれたこと」相当箇所を語る。国会本：60句城の四郎官途、高野本：横田河原合戦に相当する。

したがって天草版巻第三第一章段は、国会本：54句義仲謀叛＋60句城の四郎官途相当部分をもって語られることになる。

総じて言えば第一章段前半には、義仲の旗挙げ・諸国の反平家動勢の報（54句）、後半（60句）には、義仲の横田河原合戦の勝利・平家の油断（nurui 空気）が語られている。このように古典平家（国会本）巻第六（全10句）中の2句だけで成り立つ天草版平家巻第三第一章段には、編纂者不干ハビヤンの大胆にして細微な構成力をみることができる。取捨選択の妙がみられる。義仲

に焦点を絞る筋立ての簡明さは、主題を明確に打ち出し、巻第三を象徴するものである。(国会本巻第六の大部分を割愛している天草版平家は、古典平家の構成内容量との乖離が大きい。これは、両平家の質的な差異をもみせることになる。)

因に国会本巻第七と対応する天草版平家の章段をあげておく。巻第七全10句が、天草版平家第二章段～第八章段にとりこまれている様子を見ることができる。

第 二	第61句	平家北国下向	巻第七
	第62句	火打合戦	
第 三	第63句	木曾の願書	
第 四	第64句	実盛	
第 五	第65句	玄昉の沙汰	
	第66句	義仲山門牒状	
	第67句	平家の一門願書	
第 六	第68句	法皇鞍馬落ち	
第 七	第69句	維盛都落ち	
第 八	第70句	平家一門都落ち	

2-4 天草版平家巻第四第一章段

天草版平家巻第四第一章段 頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味しようとつかいをたてたれども、平家同心せられなんだこと、を巻第三第一章段と同じく、国会本と対校させると、次のようになる。(参考のために国会本巻第九と天草版平家との対校表をのせておく。)

天草版平家巻第四	古典平家（国立国会図書館蔵本）		備 考
	登載章段名	不登載章段名	
第 一	第80句 義経熱田の陣		巻第八
第 二	第81句 宇治川		巻第九
第 三	第82句 義経院参		
第 四	第83句 兼平		
第 五	兼平		
第 六	第84句 六箇度のいくさ		
	第85句 三草山		
第 七	第86句 熊谷・平山一二の駆		
第 八	第87句 梶原二度の駆		
	第88句 鴨越		
第 九	第89句 一の谷		
第 十	第90句 小宰相身投ぐる事		

さらに登載句：第80句義経熱田の陣の小題目（小見出し）を示す。80句が分断され、義仲悪行のみが巻第三第十三章段にとりこまれている様子を見ることができる。

第80句	義仲悪行	卷第三 第十三
義経熱田の陣	公朝・時成熟田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事	卷第四第一

天草版平家卷第四第一章段が、国会本巻第九第81句から起こされるのではなく、第80句義経熱田の陣（巻第八）から始まることが注目される。

国会本第80句義経熱田の陣は、義経悪行 公朝・時成熟田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事 の6小題目から成り、これをもって国会本は巻八が終る。この6小題目の冒頭、義仲悪行のみをとりこみ、第79句法住寺合戦とともに一章段を成したのが、巻第三最終章段の第十三章段（木曾都において狼藉をなすを法皇からして戒めさせられたれば、法皇のござる法住寺殿まで押し寄せて、合戦をし、御所を焼いたこと）である。後の5小題目は巻第四第一章段へ移行している。法住寺合戦の後日譚相当部分をすべて巻第四第一章段へ移行させ、巻第三の最終章段には「義仲悪行」のみをとりこむという構成の組替えは、編者不干ハビヤンの編纂姿勢が窺われるところである。『天草版平家物語』の筋立ての単純化・内容把握の容易さを工夫した構成力が効を奏するところである。編者不干ハビヤンの大胆さ・緻密さに裏付けられた日本語テキストとして、文学性の理解を助ける筋立ての簡潔さ、内容把握の容易さを意図したものが『天草版平家物語』である。

3 おわりに

これまで5回にわたり古典平家物語（主として高野本・国会本）と、天草版平家物語との構成比較を試み、報告してきた。

今回は、これらの報告を再吟味するために、次の2点を観察することにした。

1. 天草版平家物語を編む際の基準

（序に明記してある ①書物の如くにせず、兩人相對して雑談をなすが如く、書写すること ②一人にあまたの名、官位の称えあることを避くべし ③本書のことはを違えず書写すること）

この①・②・③の目的基準を、巻第一第一章段によって吟味する。

2. 全四巻第一章段の観察

『天草版平家物語』（大英図書館蔵本・1592年＝文禄元年、イエスズ会天草学林刊、不干ハビ

ヤン編纂)の原名は, “NIFON NO COTOBATA TO Historia uo narai Xiran to FOSSVRV FITO NO TAMENI XEVA NI YAWARAGETARV FEIQE NO MONOGATARI” である。外来宣教師(主としてポルトガル人)のための日本語テキストであり, 本文はポルトガル語式のローマ字綴によって表記されている。VM. (右馬の允) と QI. (喜一検校) の対話体によって「平家の由来が大略わかるように」語られてゆくものである。

再吟味の結果得られた要旨を, 箇条書きとして記しておく。

1. ①雑談形式による本文の書写の模様

全四巻の第一章段をみると, VM. と QI. の対話形式によって始まることは共通であるが, 特に巻第一第一章段における VA. と QI. の対話が, 生き生きとくりかえされるのが注目される。

- (VM. 検校の坊, 平家の由来が聞きたいほどに, あらあら略してを語りあれ。
QI. やすいことでごさる: をうかた語りまらしょうず。まず平家物語の書きはじめにわ～
VM. さてさてそれわいたづらなことを公家たちわせられたの?
QI. そのことでごさる。あの公家たちがこのやうなことをせらるることわ, ~
VM. そのやうに悪口狼藉をせられたれども, みな人がこらえていたよの?
QI. そのことでごさる: 上古にわかやうのことがござったれども, ~
VM. してそれわなんと果ててあったぞ?
QI. なかなか, なを先を語りまらしょうず。さてそのままでもをかれいで~
VM. さてさて忠盛とゆう人わをぞい人であったの?
QI. して, こればかりとをぼしめすか? 忠盛とゆう人わ文武二道の人でござった。~
VM. それわいかほどの齢を保たれてあったぞ?
QI. 年五十八で死なれてござる清盛わ嫡男でござったによって, ~
VM. なう喜一ついでにその清盛のことをも聞きたいよ。
QI. こなたさえくたびれさせられずわ, 私わなんぼうなりとも語りまらしょう。
VM. いいや, このやうなことをば身どもらわ七日七夜聞いてもあかぬぞよ。
QI. それならば語りまらしょう。清盛家督を受けとられてより, ~
VM. して清盛の嫡子をばなんとゆうたぞ。
QI. 重盛と申した。また次男わ宗盛, ~

のようにして, 第一章段はおわる。

②一人にあまたの名, 官位の称えあることを避くべし

Qiyomori に対する高野本の様相を第一章からみる。

Qiyomori : 清盛, 清盛公, 六波羅殿, 入道相国, 禅門 (他に, VM. QI. が問答で用いる Qiyomori, 主語をおぎなう Qiyomori のように, 理解を助ける配慮がみうけられる。)

③力の及ぶところは本書のことはを違えず書写する 様相を, 天草版平家11頁1~19(禿髪前半部分)でみた。一部を示す。

天：さて Qiyomori 五十一の頃病におかされ、存命も不定に見えたによって、その祈りのため

高：角て清盛公、任安三年十一月十一日、年五十一にて、病にかされ、存命の為に

にか出家入道して法名をば浄海と名のられてござった。

忽に出家入道す。法名は、浄海とこそ名のられけれ。

文語体から口語体へ、雑談形式というように文体に変化があり、理解を得るためにことばの増減は見られるが、文意の一致はみることができよう。

「天道 (Tentō)」が注目される。第一章段に出てくる Tentō、また他に 5 例天草版平家に出現する Tentō は、古典平家では「天道」として対応せず、「天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明」である。『日葡辞書』には、Tentō の二義（一般意味・教会意味）が記されている。「天照大神・正八幡宮・八幡大菩薩・神明」を、デウスを意味する「Tentō」に改めた不干ハビヤンの、日本在来の仏教や神道に対峙する視点をうかがうことができる。

2. 全四巻第一章段の観察

○ 巻第一第一章段の注目点

高野本から祇園精舎・殿上闇討・鱸・禿髪・吾身栄花の 5 章段分をとりこんでいる。特に注目されるのは、冒頭である。

QI. は次のように語る。(やすいこととござる：をうかた語りまらしょうず。) まず平家物語の書きはじめにわをごりをきわめ、人をも人と思わぬやうなるものわやがて亡びたとゆう証跡に、～

古典平家の冒頭「祇園精舎」祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。～

の総序とも言えるものが天草版平家では排除されている。語り本・読み本系『平家物語』には冒頭に「祇園精舎」を持ち、諸行無常・盛者必衰の仏教思想が主題とされている。これを欠く天草版平家は、古典平家との乖離が大きい。古典平家から独立した天草版平家を象徴的に現わしていると言えよう。前述した「天道 Tentō」も、細心の注意を払い、キリスト教と対立関係にある神道・仏教的な要素を巧みに排除している。

○ 巻第二第一章段の注目点

天草版平家第一章段は、Guiuō 章段である。古典平家からの省筆も少ない。注目されるのは Guiuō 章段の位置である。古典平家（高野本）では、吾身栄花に続いて祇王章段がみられるが、天草版平家では大きく移行して巻第二の冒頭に来ている。天草版平家においてこのような移行をみせるものは、他には見られない。これまでに、このような Guiuō 章段の位置について山田孝雄氏・土井忠生氏・小島幸枝氏の論証がある。鎌田廣夫氏の「天草本」祇王の話と頼政謀叛との並べ方は全く無関係だとは思はれないのである。とされるのは卓見と言える。

清盛に対する私憤から出家する Guiuō, 宗盛に対する私憤から高倉宮以仁王に対して「なましひに私には企られず、宮をすすめ参らせ」て謀叛を企てた頼政、この親子（清盛・宗盛）の fuxiguina coto が、並べて語られるのは、平家衰亡の前兆を鮮明に現わそうとするハビヤンの意図と読みとることができる。

○ 卷第三第一章段の注目点

注目点は取捨選択の妙につきる。

古典平家（国会本）巻第六（全10句）中の2句（54句義仲謀反+60句城の四郎官途）だけで成り立つ天草版平家巻第三第一章段は、編者不干ハビヤンの大胆にして細微な構成本力によるものである。木曾義仲に焦点を絞る筋立ての簡明さは、巻第三の主題を明確に打ち出し、巻第三を象徴するものと言える。

不登載章段の扱いにも、ハビヤンの大胆さがみられる。

- ①高倉院説話群：51句高倉の院崩御にはじまる51句から、高倉院に拘わる52句紅葉の巻 53句葵の女御（含小督）のすべてを削除
- ②清盛説話群：55句入道死去（含築島）56句祇園女御（含慈心坊） 57句邦綱死去のすべてを削除
- ③第58句須俣川：須俣合戦は、清盛亡き後初めて源平が対峙し、平家が勝利をおさめた大切な合戦である。それを削除
- ④第59句城の太郎頼死：城の太郎資長の怪死説などを削除

これらの天草版平家に削除された諸章段は、古典平家の大河のうねりを支えるものである。この夥しい量・質は、木曾義仲と直接拘わりを持たないものとして排除された。したがって巻第三第一章段は、不干ハビヤンの意図的な改編による成果がみられる章段と言える。

○ 卷第四第一章段の注目点

巻第三第一章段は、不干ハビヤンの意図的な改編によって、木曾義仲に注目を集めることに成功している。

巻第四第一章段にもハビヤンの意図的な改編をみることができる。

天草版平家巻第四第一章段が、第81句宇治川（巻第九）から起こされるのではなく、第80句義経熱田の陣（巻第八）から始まることがまず注目される。第80句義経熱田の陣は、義仲悪行 公朝・時成熟田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事 の6小題目から成り、これをもって国会本は巻第八が終る。この6小題目の冒頭、義仲悪行のみをとりこみ、第79句法住寺合戦とともに一章段を成したのが巻第三第十三章段である。後の5章題目は巻第四第一章段へ移行している。法住寺合戦の後日譚相当部分をすべて巻第四第一章段へ移行させ、巻第三の最終章段に「義仲悪行」のみをとりこむという構成の組替えは、注目されよう。

第一章段の題目中に「木曾が悪行」として登場する義仲は、第四章段（木曾兼平に行きや

うて、三百騎になって、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと)の結末が予告されていることになる。第80句を巻第三終尾(第十三章段)と巻第四第一章段に2分し、『天草版平家物語』の筋立ての単純化・内容把握の容易さを工夫したハビヤンの構成力が注目される。

各巻冒頭章段すべてに、不干ハビヤンの編纂者としての工夫がみられる。それはすべて日本語テキストとして『平家物語』を、よりよく理解させようとする一点にあると言える。

参考論文・参考図書

『天草版平家物語』考 大東文化大学紀要人文科学第38号 市井外喜子

『天草版平家物語私考』市井外喜子 新典社

『天草版平家物語』考(2) 大東文化大学紀要人文科学第40号 市井外喜子

『天草版平家物語』考(3) 大東文化大学紀要人文科学第41号 市井外喜子

『天草版平家物語』考(4) 大東文化大学紀要人文科学第42号 市井外喜子

『天草版平家物語』語句ノート 日本文学研究第29号 市井外喜子

『天草版平家物語対照本文及び総索引 本文篇』江口正弘 明治書院

新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店

新潮日本古典集成『平家物語』新潮社

『邦訳日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実編訳 岩波書店

『天草版平家物語の基礎的研究』清瀬良一 溪水社

『吉利支丹文献考』土井忠生 三省堂

『吉利支丹語学の研究』土井忠生 三省堂

『キリシタン文献の国語学的研究』小島幸枝 武蔵野書院

『天草本平家物語の語法の研究』鎌田廣夫 おうふう

『平家物語考』山田孝雄 勉誠社

(2004年9月22日受理)